

# スポーツクライミングの五輪種目決定 — 日山協の今後の取り組みと課題

尾形好雄 ((公社)日本山岳・スポーツクライミング協会副会長兼専務理事)

### はじめに

2016年8月3日(日本時間4日午前5時)、ブラジルのリオデジャネイロで開催された第129回IOC総会で、東京2020オリンピックの追加競技種目として提案されていたスポーツクライミング、野球・ソフトボール、空手、スケートボード、サーフィンの5競技18種目(選手総数474人)が一括承認された。

これに至る経緯は、以下のとおりである。

2014年12月にモナコで開催された第127回IOC総会で、トーマス・バッハIOC会長は、中長期改革「オリンピック・アジェンダ2020 20+20提言」を提案した。アジェンダでは、現在の夏季五輪競技種目28の上限を撤廃して、開催都市のオリンピック組織委員会が一つまたは複数の競技種目を追加提案することができる、とされた。

これを受けて翌2015年5月、東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会(以下「組織委員会」という。)では、33の非五輪競技団体に応募用紙を発送した。そして同年6月、組織委員会では、応募のあった26競技団体から8競技団体に絞りこんだ。次いで組織委員会は、8月にこの8競技を統括する国際連盟(IF)とヒアリングを行った。スポーツクライミングは、国際スポーツクライミング連盟(International Federation of Sport Climbing 以下「IFSC」という。)と日本山岳協会(以下、「日山協」という。)が一緒になって、組織委員会にプレゼンテーションを行った。

追加種目検討会議には、御手洗富士夫座長(経団連名誉会長)ら7人の委員と3人のオブザーバーが

出席。最終候補に残った8競技について検討した。検討に当たっては3つの主要原則①若者へのアピール②国民機運の向上③公正で開かれた選考プロセスを重視し、そのうえで計画やコストなどについて調査した。

事前の予想通り野球・ソフトボールは「日本の国民的スポーツ」であること、空手も「日本発祥で世界各地に広まった競技」ということで、②の国民機運が向上する評価が高く、すんなりと決まった。

一方で、スポーツクライミングは「アウトドアブームの代表格。これまでの五輪競技にはなかった垂直方向に登るアスリートの力を競うという特徴がユニークな新しい価値をもたらす」、スケートボードは「ストリートスポーツの代表格として抜群の若者へのアピール力」、サーフィンは「マリンスポーツの代表格」ということが評価。何れも①の若者へのアピールに該当するもので、この5競技のパッケージが「東京五輪大会に最も大きな付加価値をもたらすベストな組み合わせ」(御手洗座長)ということで一致し、組織委員会の理事会でも承認された。種目の内容やチーム・選手数などはIOCが事前に示した500人の上限に基づき当初の提案から変更され、最終的に5競技18種目で474人の提案となった。

9月28日に組織委員会は、これらを1パッケージとしてIOCに提案することを発表した。これを受けてIOCでは2016年6月の理事会で、組織委員会の提案を8月の総会に諮ることを承認し、8月の総会決議となった次第である。

正式決定されたスポーツクライミング競技は、メ

ダルの数（種目）は、男子・女子各1の計2種目。選手数は、男子・女子各20人の計40人。競技の内容は、リード、ボルダリング、スピードの3種目複合。順位は3つの合計ポイントで確定すると思われるが、詳しいオリンピック・フォーマットは、未だIFSCから提示されていない。

IOC総会では、追加競技の会場についても提案され、スポーツクライミングの競技会場は、お台場の江東区青海地区アーバンスポーツ広場とされ、12月7日のIOC理事会で正式に承認された。



IFSCクライミング・ワールドカップボルダリング加須大会2016  
((公社) 日本山岳協会 提供)

## スポーツクライミング競技

スポーツクライミングは、自然の岩場での冒険的な挑戦にそのルーツを持ち、身体的な可能性を追求していく過程で愛好者が増え、「競技としてのスポーツクライミング」が確立された。スポーツクライミング競技の歴史は新しく、1989年に開催されたワールドカップが最初の国際的な規模の正式な大会だ。

その後、元々フリークライミング人口の多かったヨーロッパを中心に急速に発展し、1991年には世界選手権がスタート。そして当初リード種目のみが開催されていた大会も1999年までには現在と同じ3種目の大会開催となった。

IFSCが認定する公式競技大会で行われている競技は、「リード」、「ボルダリング」、「スピード」の3種目。

## <リード>

リードは、高さ12m以上の壁に、最長60手程度のルートを制限時間内にどこまで登れるか、その到達高度を競う種目。選手はロープの繋がったハーネスを装着し、途中の確保支点到ロープをかけることで安全を確保しながら登り、最後の支点到ロープをかけると完登と見なされる。

最も長い距離を登る種目であるため「持久力」が勝敗を分ける重要な要素であることが特徴。また、最初から最後まで全力で登り続けられる距離ではないため、最小限の力で重力に打ち勝ち自身の高度を上げていく「テクニック」や無駄な動きを省き長い距離の中でも自身の動きをいかにコントロールしていくかなどの「戦略性」も問われる種目となっている。

競技大会では、予選、準決勝、決勝を経て勝者が決定する。予選では2本のルートにそれぞれ1回のみトライできる。予選は1本のルートにつき制限時間は、6分間。トライする前の選手は、基本的に他の選手のトライを見ることはできないが、予選では予め実際にもしくはビデオでデモンストレーションを見ることができる。

準決勝と決勝では、それぞれ1本のルートを1回のみトライできる。準決勝と決勝の制限時間はそれぞれ8分間。競技の前には、進出選手全員で予め6分間のオブザーベーション（ルートの確認）をすることができる。準決勝には26名（予選が2グループに分かれた場合は13名ずつ）、決勝には8名進出できるのが一般的。

順位の決定方法は、各選手の獲得高度（どの高さまで登ることができたか）で決まり、墜落、時間切れ、反則した時点での高度が獲得高度になる。ルートには、下から順番にホールドに番号がふられており、何番目まで到達できたかの数字がスコアとなる。

## 2. 登山界の現状と課題

もし、獲得高度の同じ選手がいた場合には、カウントバック（前ラウンドでの順位が高い選手を優先する仕組み）が適用され、それでも同順位の場合は、獲得高度までのタイムが短い選手が上位となる。

### <ボルダリング>

ボルダリングは、高さ5m以下の壁で、最大12手程度に設定された複数のコース（課題と呼ばれる）を制限時間内に幾つ登れたかを競う種目。定められた位置からスタートして、ゴールホールドを両手で触り安定した姿勢を取ると完登とみなされる。選手はハーネスを装着しないが、地面には落下時の衝撃を吸収するマットが敷かれている。

課題を登るための一つ一つの難易度や強度、不安程度がどの種目よりも高いことが特徴。そのため、選手にはよりダイナミックな動きやテクニカルな動きが要求され、メンタルのコントロール力も順位を大きく分ける要因となる。

競技大会は、予選、準決勝を勝ち抜いたファイナリスト6名が決勝に挑む3ラウンド。予選と準決勝は、各課題5分間、決勝は各課題4分間で競技が行われる。準決勝には20名（予選が2グループに分かれた場合は10名ずつ）、決勝には6名進出できる。予選と準決勝は、ベルトコンベア方式という形式で行われることが一般的。各選手は「5分間の競技」と「5分間の休憩」を交互に繰り返し、予選では5課題、準決勝では4課題の競技を行う。選手は5分間の競技時間でオブザベーションも行う必要があり、他の選手のトライを見ることはできない。また、5分間で登りきる必要があるため、競技時間終了時点で課題の途中にいた場合は、トライを止めなければならない。

決勝は、ワールドカップ決勝方式という形式で行われることが一般的。4つの課題が用意され、1課題に対して全ての選手が「4分間の競技」を終えた

時点で全選手が次の課題に移る。他の選手のトライを見ることはできないが、進出選手全員で予め各課題2分間のオブザベーション（課題の下見）を行うことができる。また、競技時間終了時点でトライをスタートできていれば、途中でやめる必要はなく、完登、墜落、反則するまで競技は続けられる。

順位は、「完登した課題の数」で決まるが、同数の場合は、「完登に要したトライ数」の少ない選手が優先される。また、各課題にはボーナスと呼ばれる高度が定められており、「完登した課題数」、「完登に要したトライ数」が同じ場合は、「ボーナス獲得数」、「ボーナス獲得に要したトライ数」の順番で順位が決定される。これらも同じであった場合は、準決勝など前のラウンドの成績（カウントバック）が適用される。

### <スピード>

スピードは、高さ10mもしくは15mの壁で、予めホールドの配置が周知されているコースをどれだけ早く登るかを競う種目。選手はロープの繋がったハーネスを装着するが、トップロープ（ロープが終了地点付近で予め支点確保されている。）スタイルで行うため、途中の支点確保は必要ない。

選手たちは、同じルートで何度もトレーニングを行い、動きを身体にしみこませている。それでも競技大会では隣を登る対戦相手からプレッシャーを受けながら、自らのベストタイムをたたき出すのは至難の業。プレッシャーをはねのけ、どれだけ自分の登りに集中できるか、という心理戦でもある。

一般的には、予選と決勝トーナメントで行われ、予選では同一コースが配置された2つの壁で、それぞれ1トライずつの計2トライ。決勝トーナメントでは、どちらかの壁で1トライのみ行うことができる。予選では2トライのうち速い方のタイムを使用することができ、基本的には予選参加者の上位16名が決勝トーナメントに進出できる。

決勝トーナメントでは順位が上位の選手と下位の選手が1回戦で当たるように生まれ（1位と16位、2位と15位等）タイムの早い選手が勝ち上がる。タイムが同じ場合は、カウントバックが適用されるが、準決勝（残り4人）と決勝（残り2人）のラウンドで同じタイムの場合は、もう一度競技を行う。

因みに2015年の世界記録（15m壁）は、男子・5秒60（ダニアエル・ボルディヤフ選手）、女子・7秒74（イウリア・カプリナ選手）。

### 日山協の取り組みと今後の課題

日山協では、2015年9月にスポーツクライミングが組織委員会から追加競技種目としてIOCに推薦されたことを受けて、正式決定は間違いないと考え、同年11月に会長諮問委員会を立ち上げ、以下の3項目について諮問した。

- (1) スポーツクライミングのオリンピック種目化に伴う中央競技団体(NF)としての在り方と組織。
- (2) スポーツクライミングを統括するNFの名称。
- (3) スポーツクライミングの広報強化。

これらの3項目については、2016年4月21日に次のような答申を受けた。

- (1) スポーツクライミングに特化した独自性の高い事業部等を設けて運営を行う。
- (2) 統括団体の名称と競技名称が同一であることとして、「公益社団法人日本山岳・スポーツクライミング協会」の名称が望ましい。
- (3) 専門知識を持ち、実務に秀でた人材を登用した広報戦略の強化。

日山協では、この答申を重く受けとめ、2016年8月27日に臨時理事会を開催し、答申の対応を協議した結果、答申に沿った方向で取り組むことを決議した。

### 1. 東京五輪推進室の設置

2016年8月に追加競技として決定されたので、直ちに会長直轄の「東京五輪推進室」設置して、東京2020年オリンピックに関わる案件に対処することにし、室長には副会長が当たり、業務を統括することにした。

### 2. 組織体制の見直し

これまでの「競技部」を「スポーツクライミング部」とし、答申に沿ったスポーツクライミングに特化した事業部に改編する。それに伴い、日本山岳協会組織・管理運営規程の専門部名と設置委員会を変更し、分掌業務を次のとおりとする。

#### <スポーツクライミング部>

##### (1) 競技委員会

- ア スポーツクライミング競技大会の準備、運営に関する事項
- イ スポーツクライミングの指導、普及、安全に関する事項
- ウ スポーツクライミング指導者の養成、認定、研修に関する事項
- エ パラクライミング競技大会の準備、運営や代表選手の選考、派遣のサポートに関する事項  
(パラクライミング小委員会)

##### (2) 技術委員会

- ア ルートセッターの養成、認定、研修、指導に関する事項
- イ 審判員の養成、認定、研修、指導に関する事項
- ウ 審判員及びルートセッターの競技大会への派遣に関する事項
- エ 競技規則に関する事項
- オ スポーツクライミングの競技施設及び用具等の基準、認定、指導に関する事項

##### (3) 強化委員会

- ア スポーツクライミングの競技力向上、選手強



## 2. 登山界の現状と課題

化に関する事項

イ スポーツクライミングの代表選手の選考に関する事項

ウ スポーツクライミングの国際大会の派遣、渉外に関する事項

### (4) 国体委員会

ア 国体山岳競技の準備、運営、審査、指導に関する事項

イ 国体山岳競技の競技運営員の養成、認定、指導に関する事項

ウ ブロック別研修会の運営に関する事項

### (5) 広報マーケティング委員会

ア スポーツ競技団体としての広報マネジメント、マーケティングに関する事項

イ スポーツクライミングのステークホルダーに関する事項

### (6) アスリート委員会

ア スポーツクライミング事業に選手意見を反映させる事項

## 3. スポーツクライミングを統括するNFの名称について

答申とおり「公益社団法人日本山岳・スポーツクライミング協会」(英文名: Japan Mountaineering & Sport Climbing Association、略称: JMSCA とする。)に改称する。

2016年8月27日の臨時理事会で、この改称案が、承認されたので、直ちに加盟団体への改称キャンペーンの展開や、パブリックコメントを求めるなど、広く理解を求めた。その後、11月13日の臨時総会において法人名称の変更に伴う定款変更を決議した。新法人名称は平成29年度から施行する。尚、日山協は改称するが、加盟団体である47都道府県山岳連盟(協会)の名称については、各加盟団体の意向を尊重することにした。

## 4. 選手強化及び指導者養成

東京2020オリンピックでは、前述したように3種目複合の競技となる。この競技方式は、国際的にもこれまでに無かったものであり、新たな競技方式に対応した選手強化計画が必要になる。現在、日本選手は、リードとボルダリングにおいては高いレベルの競技力を持った選手を有しているが、スピード競技については、国内にスピード専用の施設が無かったことなどもあって、現在スピード競技を主とした選手がいない。指導者においても知識や経験が不足している。このスピード競技への対応が喫緊の課題である。幸い昨秋から今春にかけて国内に相次いでスピード専用施設が竣工、着工され、練習環境は整いつつある。

質の高い指導者の養成については、JOCのナショナル・コーチ制度を活用してナショナル・コーチ、アシスタント・コーチ、専任コーチを設置して、指導者が指導し易い環境を整えて指導強化を図る。



IFSCクライミング・ワールドカップリード印西大会2014  
(公社)日本山岳協会 提供

## 5. 競技会の価値向上

スポーツクライミングの国内愛好者は急増しており、知名度も上昇傾向にある。一方で、スポーツクライミングは“見せるスポーツ”として潜在的なポテンシャルも高い。大会運営能力を向上させ、観衆

にとって判り易い競技会を作り、スポンサーにとっては価値ある競技会にして、競技会を通じてスポーツクライミングの認知向上と普及に努める。

## 6. 人事交流と情報収集

東京2020オリンピックまでは、IFSCとの連携を密にして、あらゆる情報をタイムリーに入手する必要がある。今年3月、カナダのケベックで開催されるIFSC総会では、役員改選が行われるので、ボードメンバー候補者を日山協から推薦して、IFSCへの役員送り込みを図る。

また、組織委員会のスポーツマネージャーやJOC国際人養成アカデミー等に人材を送り込み、組織委員会、JOC及び他の五輪競技団体との交流を通してオリンピックに関わる情報収集を図る。

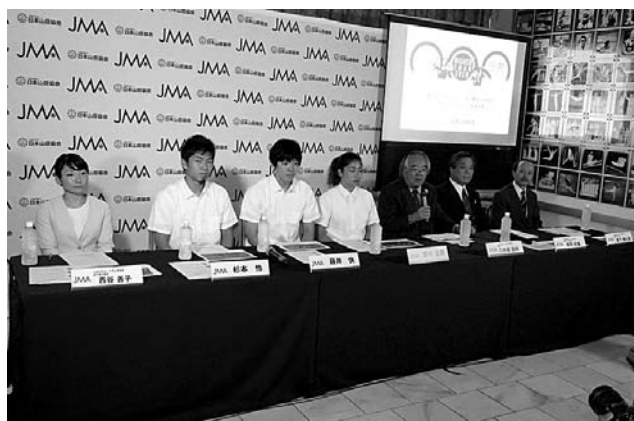
## 7. マーケティング

スポーツクライミングの五輪種目化により、国内におけるスポーツクライミングのマーケットは確実に拡充している。スポーツクライミングのBusiness to Business 戦略を構築して価値創造を図る。

東京2020オリンピックまであと3年半。この他にもやらなければならない課題は山積しており、待ったなしの状態に追い詰められている。スポーツクライミングが東京大会後も正式種目として残るためには、何としても東京2020オリンピックでのスポーツクライミング競技を成功裏に終了しなければならない。日山協は、死に物狂いで頑張ります。皆様のご支援・ご協力を宜しくお願いします。



2016世界選手権：2016世界選手権男子ボルダリングで優勝した植崎智亜選手（(公社)日本山岳協会 提供）



2016年8月4日、五輪種目の正式決定を受けての記者会見（(公社)日本山岳協会 提供）